

埼玉育ちのグローバル人

駅伝選手だった私がモザンビーク経由で ミツバチを育てるウメ農家になった話



埼玉県マスコット
「コバトン」

第1回 「ミツバチとの出会い」

元 JICA 海外協力隊員 2016 年 4 次隊

寺田 篤哉さん



私は 2017 年 3 月から JICA 海外協力隊でモザンビークに派遣されていました。

コミュニティ開発隊員として養蜂が盛んな農村部で、養蜂を取り入れた地域の活性化を目標に活動していました。

そんな私は現在、越生町でミツバチを飼いながら梅の栽培を行っています。越生町では「グローバル人」としては生活をしていませんが、国際交流の中で生きてきたことが、今の自分を作っていると思っています。

私はさいたま市出身で、小さい頃から勉強よりも運動が大好きな子どもでした。特に得意なのは長距離走。中学を卒業後、山梨学院高校に駅伝部のスポーツ特待生として越境入学しました。当時の山梨学院高校駅伝部は 1 学年上のケニア人留学生(コスマス先輩)が在籍しており、彼との出会いが私にとって初めての「アフリカ」との出会いでした。コスマス先輩はケニアのキシイという地域出身で、そこで 3 年に 1 度の日本行きをかけたレースを勝ち抜き、日本への切符を手に入れて来日したハングリーなエリートです。

練習をともにするだけでなく、学生寮の同部屋で一緒に生活をしていました。私がコスマス先輩にカルピスウォーターを教えたらまんまとハマリ、飲み過ぎて太ってしまい二人で怒られた事を、カルピスのペットボトルを見ると今でも思い出します。

そして、私が 2 年生の頃、ケニアに住んでいる彼の

弟が病気で亡くなりました。原因はマラリアでした。しかし大事な大会前でケニアに帰ることは出来ず。涙を流しながら「てらだ、おれはかなしいよ。かえりたいよ。」というコスマス先輩に対して、当時 17 歳の自分は何も出来ず、何も言えませんでした。

山梨学院と言えば、平成初期に 3 度の箱根駅伝優勝。優勝の立役者はもちろんケニア人の留学生でした。彼らのおかげで、我々のチームは強くなりましたし、日本の学生駅伝のレベルは上がったと思っています。コスマス先輩の件もあり、何かアフリカに対して恩返しが出来ればと考えながら学生生活を送るようになりました。



高校駅伝県大会優勝
(筆者は前列左から 2 番目)

留学生のいるチームですからトレーニングはとてもハードで、高校三年間で 2 度の半月板損傷で手術もしました。そんな中で、「蜂針療法」という患

部にミツバチの針を刺して治療をする民間療法と出会い、膝の痛みが無くなったのです。そこから養蜂の世界にのめり込んでいき、高校を卒業して山梨学院大学に進学した後も陸上部の練習と並行し、甲府市の養蜂場で勉強させてもらいました。



ミツバチ&女王蜂

遣されないならあなたかも知れない」とブラジル人の先生に日本語で言われた時は肝を冷やしましたが、日常会話の例文や養蜂に使う言葉をとにかく丸暗記し、無事 2017 年 3 月にモザンビークに派遣されることになったのです。



日本を出発

結局、箱根駅伝出走の夢は叶いませんでしたが、「大学を卒業したら養蜂家になりたい！」という新しい目標に向かって突っ走ることになったのです。そして大学を卒業後、福島県二本松市の養蜂場に就職しました。二本松市には全国で 2 か所しか無い、JICA 海外協力隊の派遣前訓練所があります。3 年間養蜂場で働きながら何度か訓練所に相談に行き、自分の持っている養蜂の技術や経験がアフリカの役に立てる可能性を信じ、退職し JICA 海外協力隊に応募しました。

本来ならもちろんケニアへ行き、コスマス先輩に会えればと考えていましたが、養蜂の技術を求められている国は数国しかありませんでした。学生時代、スポーツに明け暮れ熱心に勉強をしなかった私は、高度な語学力を必要としないモザンビークを第一希望にしました。当時私の語学力は TOEIC330 点。協力隊応募者の中でも最低のラインです。「グローバル人」を名乗るには低すぎる点数です。しかし、養蜂の経験と熱い情熱を評価してもらいなんとか合格し、地獄の語学訓練が始まります。モザンビークの公用語はポルトガル語、まったく分からないところからのスタートでした。訓練所の同期 80 人中 1 番語学が出来ず、「もし一人派